

呼吸循環系の評価と運動耐容能改善のための運動処方は、神経・骨関節の障害を伴わないことを前提とした方法論が展開される場合が多い。しかし実際に理学療法士が対象とする例は、純粋な肺気腫や右心不全のみならず、加齢変化や脳卒中あるいは骨折などによる運動障害を伴っていることが多い。むしろ、運動障害に対する理学療法を行う中で内部障害に対応する確率が高いといえるだろう。代謝、嚥下など全身状態にかかわる管理・介入についても、運動障害を有する患者を対象とする。

そこで本特集では、運動障害を有する場合の内部障害への対応を含めた理学療法の展開について、その評価と治療の実践について整理し、臨床的な応用性を高めることを狙いとした。

■運動障害を有する患者の全身持久力低下に対する理学療法(有菌信一, 他論文)

全身持久力の評価法には、身体資源からの評価と作業成績からの評価があり、様々な負荷プロトコルが存在する。本稿では、運動障害のある患者に対するそれぞれの評価法の特徴や全身持久力の評価の必要性を解説した。

■運動障害を有する患者の拘束性呼吸障害に対する理学療法(増本正太郎, 他論文)

脳血管障害やパーキンソン病など中枢神経疾患患者が併発する合併症として、肺炎・気管支炎など呼吸器疾患がある。これは気道感染や誤嚥に起因することが多いが、その背景として拘束性呼吸障害による呼吸予備能の低下や嚥下障害がある。今回運動障害に加え拘束性呼吸障害を呈する中枢神経疾患患者に対する理学療法介入のあり方について解説した。

■運動障害を有する患者の代謝障害に対する理学療法(木村 朗論文)

高齢者および運動障害を有する患者の耐糖能障害に対する評価と治療に関し、運動障害および代謝障害に対して实际的に治療計画立案上考慮すべき運動療法のポイントを示し、運動療法の実践において全身運動に加え、局所運動を取り入れたプログラム、身体活動量の評価が奏功した例を紹介する。また、糖尿病より失明した患者さんの例を挙げ、何が運動習慣のある生活に貢献したかを考えてもらう問いを示した。

■運動障害を有する患者の腎機能障害に対する理学療法(重田 暁, 他論文)

腎機能障害を有する患者の理学療法は、慢性腎不全による透析患者のみならず、従来では安静とされてきた急性期や移植患者などに対して様々な対応が求められてきている。

個々の患者の病態を把握し、腎機能の悪化を招くことなく運動量を調整し、心機能などのリスク管理に配慮して理学療法を進め、運動機能やADLの改善、QOL向上を図っていくことが重要である。

■運動障害を有する患者の嚥下障害に対する理学療法(吉田 剛論文)

われわれ理学療法士は、生命維持に必要な嚥下機能に対して、その嚥下運動の改善にどのようにかわかれるのかもっと知るべきである。嚥下障害と運動障害は相互に影響し合うため、どちらにアプローチしても両者の改善につながるが、その認識の程度により与える影響に大きな差ができてしまう。日頃行っている急性期のPTプログラムの中で嚥下運動を行いやすい準備状態を作り、嚥下チームの一員として役割りを果たせるよう心がけたい。